

コミュニケーション能力と会話時の注視線との関係についての検討

○青森 大輝・井上 裕文・大西 巖

(広島国際大学心理学部)

目的

現在、大学生の8~9割がアルバイトに従事しており、その理由に「社会経験」が上位を占めると言われている。しかし、アルバイトにおけるコミュニケーションに悩んでいる学生も多い。実際、若者のコミュニケーション能力の低下が社会問題となっており、お互いの理解不足などによって不適応が生じやすくなっている。その結果、集団や組織における連携が不十分になり、学生のコミュニケーション能力向上が強く求められている。

私たちは、他者とコミュニケーションをとるとき、視覚からより多くの情報を受容する。相手の視線や表情を観察し、感情や意思を読み取る。また、私たちは自らの視線によって、相手に感情や意思を伝えることができる。

本研究では、実際に対人場面を設定し、大学生のコミュニケーション能力と会話時の注視線との関係について検討する。どのような対人スキルを持つ大学生が、会話時に面接者のどの顔領域に視線を集め、注視するのかを分析し、明確化することによって、大学生のコミュニケーション能力向上の一助として役立つ。

方法

調査対象者

広島国際大学の医療福祉学部および心理学部の1年生と3年生(男性16名、女性5名)の計21名。

調査時期

2018年6月中旬~7月上旬。

実験手順

実験協力者が会話時に面接者のどの部分を見ているかを実験した。質問紙は、藤本・大坊(2007)のコミュニケーションスキル尺度 ENDCORES を用いた。「自己統制」、「表現力」、「解読力」、「自己主張」、「他者受容」、「関係調整」の6因子で24項目の質問内容がある。「かなり苦手」(1点)から「かなり得意」(7点)で自己評価する。また、実験終了後に内省報告アンケートに回答してもらった。注視点座標は、赤外線を用いたアイトラッキングシステム Tobii 社製 X2-30 を用いて非拘束・非接触で獲得した。実験時間は2分30秒前後だった。視線が60ms以上停留した注視点座標を抽出した。眼部周辺、口部周辺、額部周辺、顔全体、外部の領域に分け比較した。実験はビデオ通話を使用し、面接者から実験協力者に支障のない質問をした。

結果

面接者の顔全体に対する口部周辺への注視時間割合を従属変数に、自己統制と表現力を独立変数にとり重回帰分析を行ったところ、 $R^2=0.437$ となり、5%水準で有意であった。表1より、自己統制は5%水準で、表現力は10%水

準で有意差が見られた。したがって、自己統制と表現力が高い人は、面接者の口部周辺への注視時間割合が多いことを確認した。

表1 重回帰分析 顔全体に対する口部周辺の注視割合

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t	有意確率
定数	-0.573	0.218		-2.623	0.018
自己統制	0.026	0.009	0.543	2.891	0.011
表現力	0.018	0.009	0.395	2.104	0.052

また、面接者の顔全体に対する額部周辺への注視時間割合を従属変数に、自己統制と表現力を独立変数にとり重回帰分析を行ったところ、 $R^2=0.245$ であり、5%水準で有意であった。表2より、自己統制は5%水準で有意差が見られた。したがって、自己統制が低い人は面接者の額部周辺への注視時間割合が多いことを確認した。面接者の顔全体に対する眼部周辺への注視時間割合を従属変数にとった重回帰分析においては、有意差は見られなかった。

表2 重回帰分析 顔全体に対する額部周辺の注視割合

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t	有意確率
定数	0.376	0.115		3.272	0.004
自己統制	-0.014	0.006	-0.495	-2.348	0.031

考察

本研究では、実験協力者が男性面接者のどの顔領域に視線を向け、注視するのかを計測した。質問内容には「学部学科名」、「趣味や特技」等、すぐに回答できるものの他に、「最近嬉しかったこと」等、回答に考える時間が必要なものを用意したが、表1,2の領域以外では、6スキルと注視時間との間に有意差はなかった。これらの結果、自己統制と表現力を持つ学生は、顔全体に対する口部周辺の注視割合が有意に大きくなることを確認した。初対面の場面において自己統制できる学生は、緊張の有無に関わらず、口部周辺から相手の表情や感情を読み取っていたと考えられる。口は会話中、最も動く部分で言語知覚を認知するところであり、また、顔の表情は口角で決まることが多いため、口部周辺を観察することによって自己統制を行い、相手に対応した表現に結び付けていたと考えられる。また、自己統制力のない学生は、顔全体に対する額部周辺の注視割合が有意に大きくなることを確認した。面接時に緊張し、自己統制が取れなくなる学生は、ほとんど情報が変化しない面接者の額部周辺に視線を集めていたと考えられる。

今後の課題

本実験では、アイトラッキングを用いて、実際の対人場面において、視線と対人スキルとの関係を明確化できる可能性を示唆した。しかしながら、男性面接者しか用意できなかったため、性差に対する検討をしていない。今後、女性面接者も用意し検討していく予定である。